

雷の子

カトリック町田教会
町田市 中町 3-2-1
電話 042-722-4504
FAX 042-722-4512

いかにずちの子

<http://www.machida-catholic.jp/>



「わたしの魂は主を崇め、わたしの霊は救い主である神に、喜び躍ります。主が、身分の低いはしために、目を留めてくださったからです。……」

ルカ1・47-48

どん底の果てに見たもの

主任司祭 林 正人

小中学校で「道徳」が教科化されると知って以来（小学校は今春から既に始まり、中学校は来春から）、大手書店に行く度に各出版社の道徳教科書を立ち読みし、場合によっては購入して読んでいます。

先日、学研六年生の教科書に載っていた一つのお話に目が留まりました。タイトルは『美しいお面』。あらすじを紹介しますと、
—ある殿様が二人の面打師

に「面の打ち比べ」を命じた。その内の一人、春満は、「この世で一番美しい顔の面を打とう」と思い、非常に美しい娘をモデルに面を打ち始める。ところがある日、彼を訪ねて来た一人の老婆を見て、モデルの娘は「何て汚い！」と呟く。実はその老婆は春満の母親だったのだが、彼はその事実を娘に知られるのを恐れ、「こんな人は知らない」と母親を追いつ返してしまう。しか

し罪の意識に耐えかね、仕事を飛び出し、途中で熱病に意識を失い、ふと気が付くと自分を看病してくれている人が。それは春満の母親だった。その時彼は、この世で一番美しい顔は母の顔であることに気が付いた。

何故このお話に殊更目が行ったかと言うと、実はこれ、私が子供の時分にも教科書に「道徳」だったか「国語」だったかは忘れましたが、掲載されていたからです（但しその時は、もう一人の面打師の話も載っており、タイトルも『ふたつの面』となっていたと記憶しています）。

もう四十年近く前に教科書で読んだ話に、今また触れ、感慨に浸りました。春満を通して示される、人の心に巣食う愚かさ、醜さ、罪深さ。それによって彼に押し掛かる苦悩。しかし、そんな「どん底」の状態になって、初めて気付く人（母）の優しさ、美しさ。春満は一番の暗闇の中で、そこに差し込む光を見ました。それは春満の人生、そして「人」そのものが変えられた瞬間でした。彼は「新たに生まれた」のです。

の醜さが噴出したこの場面で、ルカは「主は振り向いてペトロを見つめられた（22-61）」の一節を挿入しています。イエス様の眼差しは非難の眼差しだったのでしようか。そうではありません。それは、人間のどうしようもない愚かさ、醜さ、罪深さをいやす、主の「救いの眼差し」でした。その後、号泣したペトロの心の内に在ったのは、決して悔恨だけではなかったはずですが、確かに黒歴史ではありますが、この体験は、ペトロが「新たに生まれる」ためには、どう

運営委員会の窓口として

運営委員 結城 万紀子

運営委員会の書記をさせて頂いています。パソコンが苦手で最初はどうなることかと思いましたが、今では良い勉強の機会を頂いたと感謝しています。

書記の仕事は、まず会議の議事録の作成。それを叩き台にして「運営委員会ニュース」をまとめます。「ニュース」と銘打っているからには早く作らなければなりません。なるべく翌週迄に作るようにしています。皆様に一読で理解していただけるよう、そして読みやすく、と工夫しています。

残念なことに「運営委員会ニュース」はほとんど読まれ

しても必要だったのではないでしようか。

長い人生の中で、人間は一度や二度は、「どん底」の状態を経験します。自分の愚かさ、罪深さが明らかにになり、苦しみに押し潰されそうになります。しかし、そこにあるものは果たして「闇」ばかりでしょうか。闇を照らす光、主が、私たちを見つめて下さっています。

主に総てを打ち明け、祈りましょう。

「打ち砕かれた心をいやすために来られた、主よ憐み給え」

ていないのが現状です。ピンク色の紙に印刷された「運営委員会ニュース」は40枚印刷して、その大半は翌月に回収されます。ではそんなもの無駄ではないか、とお考えかも知れません。私も最初はそう考えました。しかし、「運営委員会ニュース」があるということは「運営委員会」があるということ。そして「運営委員会」があるということ。これは、この町田教会がしっかりと組織で運営されているということにほかなりません。

最近復活祭の玉子を配らない教会、祭壇に花を活けない教会、枝の祝日の枝は教会

ではありません。聖性、それは神様の恩恵と人との出会いです。《普通の人》であるということです」と。

今回、私たちは黙想巡礼として、男子マリア会地区長の青木勲神父様と本会のシスター方、信徒マリアニストの方々と共に列福式に参加し、創立者アデルを身近な姉妹として感じつつ、一人の福者アデルのための荘厳なミサに気づかり、喜びと感謝をささげてまいりました。

創立者アデルは貴族の娘であり、幼少期より家族の中にキリスト者の雰囲気を感じ取って成長し、イエスを深く愛するようになり、おとめマリアにすべてを託し、貧しい人たちに特別に注意を払う生き方を身につけていきました。

時代はフランス大革命後の社会、キリスト教復興の真っ直中を、志を同じくする仲間と共にマリアに奉仕する新しい修道会を創立し、「あの方の言われたことは何でもしなさい」とのマリアのことば、「マリアによってキリストへ」の道をまっすぐに歩んで行きました。

「マリアのもとに行きましよう。そうすれば、息子であるイエスに似せて、マリアによって私たちも形作られていくのです」と。

平和旬間特集

ポトピープル

祖国からの脱出

ファム・ティ・チー
(日本名 藤瀬 芝)

ベトナム戦争当時、私たちは家族は南ベトナムの首都サイゴン(現在のホーチミン市)に住んでいました。医学部を卒業した夫は軍隊に召集され、軍医として働いていました。

一九七五年、北ベトナム軍がサイゴンに侵攻すると、街は大混乱におちいりました。お金持ちたちは財産を没収され、残酷な死刑に処せられました。避難民を満載したトラックが軍の銃撃を浴び全員が殺されたときの光景は、今でも悪夢のように記憶にこびりついていきます。そんな血なまぐさいできごとをあちこちで見聞きする毎日でした。

翌年には南北ベトナムが統一され、社会主義政権が発足しました。軍隊にいた夫は再教育のため北に抑留されました。十日ほど帰すと言われたのに、いつまでたつても帰ってきません。結局、北ベトナム政府の高官であった夫の叔父(夫の母の弟)の介入によって解放されるまで、二年以上もかかったのです。

夫は地方の小さな病院で働きはじめましたが、慢性的な食糧不足もあって一家七人

(息子一人と娘四人)の生活は厳しく、その上、社会主義政権下では、カトリック教徒の居心地は決していいものではありません。差別や迫害を恐れて国外に脱出する人びとが後を絶ちませんでした。夫も船による海外脱出を試みたのですが、途中で公安によって逮捕されてしまいます。

すると、高校二年生だった息子のグエンが自分が行くと言いだしたのです。父親が旧南ベトナム軍人であったため、グエンは大学進学のを閉ざされたばかりではなく、十八歳になれば徴兵されて、カンボジア侵攻の最前線に送られ

る可能性も高いのです。私には息子を引き止めることはできませんでした。

手引きをする人たちにお金を渡して、息子の消息を知らせてくれるよう頼みました。息子は同行した従兄と一緒に無事船に乗ることができたようでした。でも取締りの目を逃れてようやく領海の外に出ても、運よく救助してくれる外国船に出遭うまで船は漂流しつづけるのです。何隻もの船が通りましたが、停まってくれる船はなく、小さな木造船は荒波にもまれながら二十日間以上も大海原を漂いつづけました。難破の危険、海賊

特別
寄稿

長崎屋と十字屋があつた町田

洛東ブロック担当司祭 菅原 友明

皆様、お久しぶりです。二〇一四年の春から一年間、町田教会で司牧実習をさせていただき大変お世話になりました。当時の主任司祭、小池神父様のご指導のもと、皆様から多くのことを学び、貴重な体験でした。

おかげさまで二〇一五年に京都にて司祭叙階の恵みに与りましたが、その際にもたくさんのお祈りと励ましをいただき、心より感謝申しあげます。叙階後は三重県の教会に任命され、次に滋賀県へ異動となり、昨春からは京都市内の四教会(河原町・山科・伏見・桃山)で働かせていただいております。

私は千葉の松戸で育ちましたが、子どもの頃、何度か町田を訪れたことがあります。当時の私の趣味は「長崎屋・十字屋巡り」

で、町田には両者の往年の主力店舗があり、魅力は尽きませんでした。湘南を舞台とする十字屋対長崎屋の競合で幕を開けたいわゆる流通戦争は、その後ダイエー対イトーヨーカドーという全国規模のものとなり、激しくも華やかでしたが、時代の流れの中で総合スーパー業態は斜陽していききました。町田の長崎屋と十字屋も敗退してとうに閉店していましたが、それでも、司牧実習で久しぶりに町田を訪れた際、その遺構を発見し、懐かしさが込み上げてきました。

なお、十字屋の創業者一族はクリスチャンです。そのシンボルマークはもちろ十字架。キャッチフレーズは「奉仕に明けて奉仕に暮れる」というものでした。



の恐怖、そして飢餓との戦い。残り少ない食料と水を節約するために、衰弱して生きのびる見込みのない人は海に投げ捨てられました。年若い女性^{ふなばた}が船端から突き落とされたあと、衰弱がひどかった息子も引き出されそうになりましたが、従兄が必死にかばって守ってくれたのです。飢えのあまり人肉を食べたという話が伝わってくるほど、ボート・ピープルの状況は悲惨でした。日本人乗組員が乗った大型船が停まってくれなかったら、グエンの命はなかったにちがいありません。乗組員たちは、行きに目撃した漂流船が帰るのを見ても東京の本社に連絡、その指示を得て救助してくれたのだそうです。



サイゴン時代の筆者（右端）と家族

出発前の打ち合わせで、どこにオーストラリアの叔母さんに連絡するよう決めておいたのです。

衰弱し肺病にかかっていた息子は、日本到着後、二ヵ月間の入院治療を受けました。

難民認定を受けてからは働きながら夜学に通い、大学を卒業しました。そして一九九二年頃、家族の呼び寄せが認められ、私と三人の娘が日本に来ることができました。でも、夫と長女は一緒にありませんでした。夫は長女を連れて再度国外脱出を図り、そのまま行方不明になってしまったのです。今も二人の消息はわからないままです。日本にきた次女と三女は夜間大学を卒業して就職、末娘は専門学校を出て今は海外で活躍しています。息子のグエンが結婚して授かった子供がもう大学生になりました。早いものです。戦争に翻弄された半世紀の記憶はあまりにたくさん、人に話すこともありませんが、若い人たちに知ってもらうことも大切だと考えて、こうしてお話ししました。今はただ、神様のみ旨のままに生きる毎日です。

【汚れなきマリア修道会のシスターの通訳を介して編集担当者がまとめました】

ヨゼフ会静修会

(5月26、27日)



犠牲献金 中高生会

6月3日 6,797円
(ベロニカ苑へ)
7月1日 8,193円
(ベロニカ苑へ)

編集後記

☆アデル・ド・パッツ列福式の模様はYouTubeでも視聴できます。

DVD視聴ご希望の方は「雷の子」編集担当者までお申し出ください。貸し出しいたします。

☆「ボート・ピープル」に掲載の写真は個人的な画像ですが、記事内容の傍証的価値のある資料と考え、ご本人の了解を得た上で掲載しました。

☆「雷の子」次号の編集会議は9月2日9時30分の予定です。

信 者 動 静

2018年5月～7月

(個人情報のため、削除しています)